

から二人で仲よく海に飛びこんで、救助された船も同じだったのです。

昭和十七年の秋に大木は帰還するが、こうした戦地での体験は、現地ジャワのアジヤラヤ出版部が昭和十七年十一月に発行した「海原にありて歌へる」に謳われている。

(五)

この「海原にありて歌へる」の中にある不朽の名作「戦友別盃の歌」がある。ちょうど二年ほど前、産経抄にて石井英夫氏がこの詩を絶賛していたことを御記憶の方もあろう。

この「戦友別盃の歌」はレコードの歌詩にはならなかつたようであるが、今回敢えて紹介する。

言ふなれ、君よ、わかれを、世の常を、また生き死にを、海ばらのはるけき果てに今や、はた何をか言はん、

熱き血を捧ぐる者の
大いなる胸を叩けよ、

満月を盃にくだきて
暫し、ただ酔ひて勢へよ、

わが征くはバダビヤの街、君はよくバンドンを突け、この夕べ相離るともかがやかし南十字をいつの夜か、また共に見ん、言ふなれ、君よ、わかれを、見よ、空と水うつところ、黙々と雲は行き雲はゆけるを

(六)

筆者と大木惇夫の出会いは、昭和六十三年師走、近所の古本屋でたまたま「豊旗雲」（昭和十九年五月刊）を見つけて買ったことにはじまる。この詩集には、「大アジヤ獅子吼の歌」「なでしこの歌」、「フイリピン独立の歌」、「山本元帥」、「次の荒鷺」のようにレコード化された詩が多い。

また大木は、昭和十八年末頃に東宝映画「あの旗を撃て」の同名の主題歌と「雲のふるさと」の作詩を担当している。

「あの旗を撃て」の方は、

悲憤の涙 戦友の

かばねを越えて 乗り越えて

幾日幾夜の 突撃に



かの雲は今も翳らむ
(三番の歌詩は省略)

(七)

戦後大木は、自分の過去に対する羞恥心に似たような感情を抱いていたようだが、詩壇から黙殺されようとも、彼は決して時流に迎合したりその過去を隠蔽することはなかつた。

確かに大木の詩に詠われた大東亜戦争は、その実相とはややかけ離れ、あまりにも純化され過ぎたきらいがある。しかし、一人の多感な詩人が感じた戦争は、また当時の多くの日本人が同じように感じていたのであつた。

(続く)